

1 事業名

令和2年度教育事業 「体験の風をおこそう」運動事業
「テンパークチャレンじくらぶ」

2 趣旨（事業の目的）

季節が秋から冬へと移り変わろうとする中で、自分たちの住む地域の「豊かさ」や大自然の中で体を動かすことの楽しさを、仲間と共に体感させる。

3 期 日 令和2年11月21日（土）～22日（日）

4 参加者 50名（盛岡市，滝沢市，八幡平市，雫石町の小学3～6年生）

5 後 援 盛岡市教育委員会 滝沢市教育委員会
雫石町教育委員会 八幡平市教育委員会

6 内 容

（1）日程

日時	13:00		13:30		14:00		15:00		17:00		17:30		18:30		19:00		20:00		21:00		21:30			
11月21日 （土）			小学生 受付	は じ め の 会	ドキドキわくわく 友達づくり （焼き芋づくり）	ドキドキわくわく 外遊び	移 動	夕 食	休 憩	ドキドキわくわく テンチャレンじびっく	入浴	就 寝 準備	就 寝											
日時	6:30		7:00		7:30		8:30		8:45		9:00		11:15		12:15		12:30		13:30		14:00		14:30	
11月22日 （日）	起 床	洗面・ 準備	つ ど い	朝 食	退 所 点 検	移 動	ドキドキ わくわく 南部 せんべい づくり	ドキドキ わくわく クリスマス リース づくり	移 動	昼 食	ア ン ケ ー ト 記 入	お わ り の 会	参 加 者 解 散											

（2）指導者

国立岩手山青少年交流の家	企画指導専門職	鈴木 茂
	事業推進係	日比野 功 宜
	事業推進係	檜 木 裕 朗
	事業推進係	中 島 理 佐
指導補助	法人ボランティア	15名

（3）企画のポイント

参加した小学生が、安全に楽しく2日間を過ごすことができるように、法人ボランティアの高校生や大学生をグループリーダーとして配置した。そして、小学生が高校生や大学生との触れ合いや体験活動を通して、友達作りや班で協力することの大切さを学ぶことができる機会とした。

企画立案に際しては、法人ボランティア向けの事業「ボランティア・ブラッシュアップ・プロジェクト」において企画会議、事前準備を行い、活動全体を通して、参加者が自分たちの住む地域の「豊かさ」や大自然の中で体を動かすことの楽しさを、仲間と共に体感できるようなプログラムづくりを目指した。地域の豊かさを体感させるために取り入れたのが、焼きイモづ

くりと南部せんべいづくりの二つの体験活動である。

焼きイモづくり体験では、地元・滝沢市の特産品であるサツマイモ品種（クイックスイート）を取り上げ、ボランティア自らが事前に収穫を体験したり、〇×クイズを考案したりするなどし、生産現場の様子が参加者に伝わるようにした。また、南部せんべいづくりではボランティアが発祥伝説を寸劇で紹介し、活動に対する参加者の興味関心が高まるよう工夫した。また青森県立種差少年自然の家との連携のもと、安全面・衛生面で万全を期した。

なお、天候に恵まれない時期の開催であることを踏まえ、天候や参加者の体調によるプログラム変更に対応できるような準備を心がけた。

（４）広報のポイント

年度当初に年間の事業一覧を岩手県内全児童に配付するとともに、当施設ホームページに事業の概要を掲載してきた。また、盛岡市、滝沢市、八幡平市、雫石町の各小学校と報道機関へは、開催要項とチラシ、ポスターを送付した。

（５）運営のポイント

参加した子供たちが楽しく安全に過ごすことができるように、子供たち6～7人の8班に法人ボランティア2～3名ずつをグループリーダーとして配置するとともに、統括リーダーがフォローできる体制を敷くことで、子供との関わり方等について相談したりアドバイスしたりできるようにし、コミュニケーションを深め、より楽しく活動できるようにした。

また、全体での共通理解を図りながら運営に関わることを目指して、本部ミーティング、スタッフミーティングなどそれぞれの役割を明確にした組織運営体制を敷き、子供たちの健康や安全に関わる情報をスタッフ全体で確実に共有できるようにした（後掲補足資料参照）。

なお、事業実施直前になって周辺地域において新型コロナウイルスの感染拡大が見られたことから、マスク着用、手指消毒等の感染予防策の徹底には細心の注意を払った。

8 成果とその普及

参加した子供たちは、はじめは不安や緊張を感じている様子も見られたが、各グループのリーダーや仲間と関わる中で次第に打ち解け、協力して活動を楽しむ姿が見られるようになっていった。子供たちがグループリーダーに親しみをもって接していくことで、経験の浅い高校生ボランティアたちも次第に自らの役割をよく理解するようになり、積極的に子供たちと関わる姿が見られるようになっていった。

参加者のアンケートには、「同じ小学校の人はひとりもいなかったけれど、積極的に声をかけてたくさん友達をつくることができた。協力する活動がたくさんあって楽しかった」、「外遊びでビンゴゲームをやったのがいちばん楽しかった。顔に似た葉っぱを見つけるのが難しかった。テンちゃれんじびっくでは、みんなで協力をして2位になれてうれしかった。また参加したい」、「外遊びが楽しかった。最初は緊張したけれど、ボランティアの人たちがやさしくて、活動がともしやすかった」、「焼きイモのおいしさに驚いた。南部せんべいも、中がふわふわで驚いた。またぜひ参加したい」などの感想が寄せられた。これらの記述から、法人ボランティアが活動を支える大きな力となっていたことをあらためて感じさせられた。また、子供たちが直接体験をとおして大自然の中で体を動かすことの楽しさを感じ取ったこと、また特産品や伝統食の手づくり体験をとおして、自分たちの住む地域にあらためて目を向ける大きなきっかけとなったことが伺

える。1泊2日という短い時間ではあったが、子供たちが十分満足できる活動を提供できたもの
と考える。

上記の成果が得られた要因として、体験活動（焼きイモづくりをする，南部せんべいづくりを
する等）をその場限りで終わってしまう単なる体験にとどめず、地域素材について学ぶ機会（寸
劇や〇×クイズ）を設けたり、地域人材や他施設と連携したりすることにより、質の高い重層的
な体験活動に高めたことが挙げられる。テンチャれんじびつや外遊びの場面においても、子供
の発達段階やこの時季における施設周辺の環境・自然条件を十分考慮した上でプログラムの内容
を検討したことが、参加者の満足度の高さにつながったのではないかと考えられる。

9 今後の課題

今年度参加した児童が、来年度参加したとしても、また同じように満足してもらえるように、
企画に携わる法人ボランティアとともに情報収集を図りながら、新規のプログラム開発も視野に
入れ活動内容を企画・運営していくことが求められる。

また、他施設との連携や直前になって感染が拡大したコロナウイルスへの対応に多くの時間を
要したこともあり、結果的にボランティアとの間で事業当日の動きについて十分な共通理解がで
きなかったことが大きな反省点として挙げられる。当日の運営も含め、企画の初期の段階から法
人ボランティアの裁量で判断できる事案は法人ボランティアに委ね、自主性や企画力を養成する
場となるようにコーディネートしていくことが、今後の当施設のボランティア養成全体に関わる
最大の課題であることが確認できた。



「ドキドキ わくわく ネチャーゲーム」「ドキドキ わくわく 焼きイモづくり」「ドキドキ わくわく 南部せんべいづくり」

【補足資料】 テンパークちやれんじくらぶ 法人ボランティア組織図

